

音がつくる空間

遠近感と強弱法

指導教員 吉松秀樹教授 印

1BEB2120 田澤 莉奈

1. 問題意識

建築の勉強の傍らオーケストラで日々音楽に触れ、音と建築の関わりに興味をもった。古代から音楽は人にとって密接なものであり、共に発展してきた。しかし現在、暮らしの中で音を意識することが薄れているのではないかと感じた。

2. 調査①「建築と音楽」

過去に、音楽から建築を考えた人や建築に合わせて曲を作り上げた人がある。建築と音楽、また大きくは造形と音楽がお互いに惹かれあいながら様々な比喩表現による関係性によって語られることが多く見られる (Fig.1) (Fig.2) (Fig.3)。



Fig. 1 クセナキスの例 Fig. 2 リベスキンドの例 Fig. 3 建築から曲をつくる

調査②「暮らしの中の音」

全ての景観において、サウンドスケープは存在している。個々の音ははっきり聞き取れるサウンドスケープをハイファイなサウンドスケープを呼び、個々の音が超過密な音の中に埋もれて方向性や遠近感、広がりが見失われているサウンドスケープをローファイなサウンドスケープと呼ぶ (Fig. 4)。



Fig. 4 暮らしの中のハイファイ・ローファイの比較

3. 分析「遠近法と強弱法」

調査より、まちの中には音があふれ、それらから音を分類できることがわかった。その中で、遠

近法と強弱法の関係について考える。音の強弱法を視覚の世界で考え、遠近法において物体が見る者からの距離に従って段階づけられるように、音楽がサウンドスケープの虚空間における強弱づけによって段階づけられる (Fig. 5)。

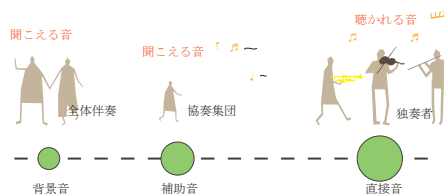


Fig. 5 三段階プランによる音の制限

4. 手法「強弱と三段階プランで音を空間化する」

空間でおこる音を背景音・補助音・直接音の3つに分け、実質的に制限する。また、直接音をプライベートな空間とし、背景音になるにつれてパブリックな空間とする。空間を上下左右に変化させ、強弱の違いを体感させる (Fig. 6)。

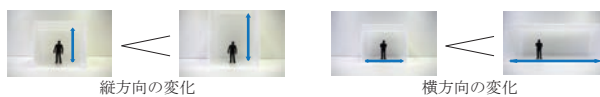


Fig. 6 空間の強弱変化

5. 提案「音を感じる」

音楽における強弱の変化や、三段階プランを用いて、身体的に音楽を感じる場所を提案する。それにより、かつては生活と密接であった音楽を再び人と結びつける (Fig. 7) (Fig. 8) (Fig. 9) (Fig. 10)。



Fig. 7 Plan



Fig. 8 模型写真①



Fig. 9 模型写真②



Fig. 10 模型写真③